

インドネシア -- 野球とクール・ジャパン (特集 途上国・新興国のスポーツ)

著者	川村 晃一
権利	Copyrights 日本貿易振興機構 (ジェトロ) アジア 経済研究所 / Institute of Developing Economies, Japan External Trade Organization (IDE-JETRO) http://www.ide.go.jp
雑誌名	アジ研ワールド・トレンド
巻	237
ページ	16-17
発行年	2015-06
出版者	日本貿易振興機構アジア経済研究所
URL	http://hdl.handle.net/2344/00003183

インドネシア

野球とクール・ジャパン

川村 晃一

●サッカーとバドミントンが

人気

インドネシアで最も国民に人気のあるスポーツといえば、サッカーである。街中の広場では、夕方になると大人から子どもまでサッカーの試合に興じているし、プロ・サッカーリーグも存在している。新聞のスポーツ欄で最も扱っているのは海外のサッカーニュースだし、テレビでは欧州サッカーの試合が頻繁に中継されている。

サッカーとならんで国民的スポーツとされているのが、バドミントンである。簡易的なコートが集落には必ずあり、子どもでも日本の大人顔負けの鋭いスイングをしていたりする。オリンピックでも、初めて正式競技に採用された一九九二年のバルセロナ五輪以来、必ず金メダルを獲得してきた（ロンドン五輪では、残念ながら初の

メダルなしに終わった）。

テニスやボクシングにも国際的に活躍するインドネシア人がある。若者の間ではバスケットボールも人気があるし、近年の健康ブームもあって都市中間層の間ではサイクリングやマラソンも盛んになってきた。東南アジアの伝統的球技であるセパタクロ（籐の球）現在にはプラスチックの球を蹴り合うバレーボールのような競技）や、マレー地域発祥の伝統武術であるブンチャック・シラット（空手に似た拳法、武器術）の愛好者も多い。

●マイナースポーツとしての

野球

ここで取り上げる野球は、インドネシアではきわめてマイナーなスポーツのひとつである。正確な数字はないが、国内の競技人口は少ないし、もちろんプロリーグも

存在しない。

インドネシアで野球がプレーされるようになったのは、一九六五年頃といわれている。日本に留学していたインドネシア人学生が帰国して野球を始めたという。しかし、その後野球がこの国に広まることはなく、むしろソフトボールの方が盛んになった。

再びインドネシアで野球がプレーされるようになったのは一九九〇年代に入ってからのものである。在留邦人社会で愛好されていた野球が徐々に現地社会にも広がっていき、学生や子どもたちを中心に競技人口が増えていった。

一九九〇年代の後半には、代表チームが国際大会にも参加するようになり、二〇〇三年に札幌ドームで開催されたアジア野球選手権では、東南アジア諸国のなかで野球の歴史が最も長いフィリピンを破る金星をあげた。アジアの野球

途上国の間で行われるアジアカップ（アジア野球選手権の予選を兼ねる）では、二〇〇九年に優勝した経験ももつ。

アジア野球連盟（BFA）が発表している二〇一四年時点でのインドネシアのランキングは、加盟二三カ国中、一位である。ちなみに、インドネシアよりも上位には、一〇位の香港から、アフガニスタン、タイ、スリランカ、パキスタン、そして五位のフィリピンといった国が並んでいる。

●なぜ野球をやるのか？

日本のように野球がメジャーなスポーツである国であれば、子どもが野球を始めるきっかけはたくさんある。親兄弟が野球をすでにやっていたり、友達に誘われて野球を始めたりするだろう。地上波での中継が減ったとはいえ、シーズン中であればニュースで必ずプロ野球の試合結果が報道される。

しかし、インドネシアではそのようなきっかけはほとんどないに等しい。メディアで野球が取り上げられることはほぼゼロに近い。周囲で野球をしている人を見つめるのも非常に難しい。実際、私がインドネシアの一地方都市である

ジヨグジャカルタという街に暮らし始めた時、なんとかして地元の人たちと野球をやりたいと同好の士を探し回ったが、なかなかみつからずに苦労した経験がある。

このような状況で、インドネシアの若者がマイナーなスポーツである野球を始めるきっかけとは何だろうか。不思議に思った私は、ようやくみつけた野球仲間はこの質問をぶつけてみた。

●日本のポップカルチャーと

野球

野球を始めた最も分かりやすい理由は、父親の仕事の関係で子どもの頃にアメリカや日本に住んだことがあり、その時に野球をしてきたというものである。海外在住経験があることから分かるように、彼らは富裕層やエリート層の子弟たちである。人数は少ないが、本場仕込みの技術を取得しているだけに、彼らのプレーのレベルは非常に高く、チーム内でも投手や四番打者など中心的な役割を果たしていることが多い。

野球を始めるきっかけとして次にあげられるのが、テレビゲームであった。インドネシアの子どもたちの間でもゲームの人気は高い。

いまはオンラインゲームが流行だが、私がジヨグジャカルタにいた一〇年ほど前は、まだ家庭用テレビゲーム機が主に使われていた。ゲーム機もゲームソフトもレンタルできるので、それほど裕福ではない中間層の家庭の子どもたちも友達とゲームをしながら遊んでいた。

ゲームソフトで人気が高かったのは、オートレースや格闘技系のものだったが、日本の野球ゲームのソフトもレンタル屋で貸し出されている（ただし、ほとんどが不正コピーの海賊版である）。「ファミスタ」や「パワプロ」といった日本でも人気のあるゲームソフトを通じて野球を知り、ルールを学んだという若者も多かった。

そして、私の友人のなかで最も答えの多かった野球との接点が、日本の漫画であった。インドネシアでは多くの日本漫画が現地語に翻訳されて、子どもたちの間で愛読されている。「キャンディ・キャンディ」や「ドラえもん」をはじめ、「名探偵コナン」「クレヨンしんちゃん」「ガラスの仮面」「ナルト」「ワンピース」「進撃の巨人」など、人気の日本漫画をあげればきりが無い。

インドネシア人にはなじみのないはずの野球漫画も翻訳出版されており、『タッチ』『H2』『なんと孫六』『ラストイニング』などが本屋の店頭には並んでいる。しかし、これらの直接的に野球を題材にした漫画でなくとも、ストーリーのなかにはしばしば野球が登場する。たとえば、『ドラえもん』のなかで、のび太が頻繁にジャイアンやスネ夫に誘われて空き地で野球をやっているように、日本の漫画では野球がしばしば取り上げられている。インドネシアの子どもたちは、漫画のなかで登場する未知のスポーツ、野球とはどのようなものなのだろうか興味を抱き、野球への扉を叩くのである。

●アジアの野球と日本人

いわゆる「クール・ジャパン」は、このように思わぬ形でインドネシアにおける野球の普及に貢献している。しかし、この国の野球と日本との関係を語る時に、忘れてはならない人がいる。インドネシア代表チームの監督を務める野中寿人さんである。

彼は、野球強豪校を卒業しながら学生時代に挫折し、いったん野

球を離れていた。偶然に関わるようになったインドネシアで野球への情熱を取り戻し、地方で若者の指導と育成に取り組みと、その実績が認められて二〇〇七年に代表監督に任命された。二〇〇九年のアジアカップ初優勝は、野中監督の指導と在留邦人社会の支援に負うところが大きい。二〇一四年からは二度目の代表監督に就任している。野中氏は、チームの強化だけでなく、指導者の育成や底辺での普及活動など、インドネシアに野球を根付かせようと奮闘している。

実は、アジア途上国の多くで野球の普及・発展を支えているのは、こういった日本人である。野球場も道具もお金もないという過酷な状況で、邦人社会の支援を得ながら長年にわたって地道な活動を続けている日本の野球人こそ、「クール・ジャパン」の代表である。

（かわむら こういち／アジア経済研究所 東南アジアI研究グループ）